

## ▼芸術士とは

私たちは、2009年に四国・香川県高松市に協働提案して芸術士<sup>®</sup>派遣事業を始めました。これは、北イタリアのレッジョ・エミリア市発祥の幼児教育法「レッジョ・エミリア・アプローチ」をトリエリスタ（芸術専門家）をお手本にして、アーティストを保育幼児教育のサポーターとして芸術士と呼称し、派遣する事業です。芸術士は、造形作家、デザイナー、ダンサー、音楽家、舞台俳優などさまざまなジャンルの出身者です。保育士、幼稚園教諭と協働し、音楽や造形を教えるのではなく、第三者の視点で触媒となつて、遊び尽くす中に子どもたちの個性の芽を育む役割を担います。

当初、高松市とこの事業の目的を定めるにあたり、子どもたちの自己肯定感を醸成する役目と置き、その手助けを芸術士がしましょうと話し合いました。活動を重ねるに従い、非認知能力を育むなど、保育の質に向上がみられると評価されるようになりました。

活動にあたっては、「芸術士が実践する4つの約束」を定めています（表参照）。本来子どもの持

## 社会と教育の架け橋 芸術と教育

### アートが奏でる創造の余白 ～芸術士の活動から～



特定非営利活動法人  
アーキペラゴ

み い ふみひろ  
代表理事 三井 文博

表 芸術士が実践する4つの約束

1	専門性を活かして、子どもの表現をサポート 想像力、創造力を育む：芸術士は、子どもたちの世界を共に楽しみ、アートの専門性を活かして、子どもたちの想像力と創造力を最大限に引き出すサポートをします。
2	なぜ・どうしての気持ちを大切に 探究心は大切な「タネ」：芸術士は、それらの好奇心に対して、すぐに答えを出すのではなく、可能な限り子ども自身が答えを探し求められる環境を作ります。子どもたちが自ら答えのヒントを見つけ出す過程を大切にしています。
3	結果を求めない 過程を大切にしています：芸術士活動は、アート作品を作ることが目的ではありません。子どもの心を尊重し、活動の型を決めず、一人ひとりの気づきや発想に共感することを大切にしています。
4	子どもの可能性を社会に伝える 活動の記録「ドキュメンテーション」を作成します：ドキュメンテーションは、芸術士の視点で拾い集めた子どもたちの言葉や発想を、写真とともに記録したものです。子どもたちの独自の心や個性の芽を発見する手がかりになるでしょう。

アーキペラゴは、多島海・群島（瀬戸内海のような情景）を称する英語。点在する島々のように、未来に繋ぎたい多様なプロジェクトを自律・分散・協調の下に運営する特定非営利活動法人です。芸術士派遣事業、放課後児童クラブのほか、瀬戸内の観光の企画等も手がける。

つ無限の個性と可能性を、私たち大人は教育と称してその芽を摘むことの如何に多いことか。これは、レッジョ・エミリア・アプローチの哲学ともいえる「子どもたちの100の言葉」（ローリス・マラグツツイ作）という詩で述べられていて、私たち芸術士の理念ともなっています。

活動16年目を迎えた24年、地元香川県内の市町、県外では愛媛県四国中央市、島根県津和野町、石川県金沢市など多くの自治体でこの活動が導入され、私たちは「芸術士派遣事業」として200を超

える施設に芸術士を派遣しました。こども家庭庁に本事業の仕組みを説明する機会も得られました。

## ▼現場の化学反応

アーティストたる芸術士は、現場では子どもたちからちゃん付けと呼ばれ、先生ではなく、お友達として存在しています。日常に馴染みにくいグレーゾーンと呼ばれる子どもたちが、芸術士に懐いて離れなかったり、真つ先に駆け寄って来たりする姿を、普段接している施設長さんが、涙目で見守ってくれることもしばしばです。

そのような現場で印象的な活動事例として今でも語り継がれているのが、「イカとの出会い」です。

芸術士派遣が始まって3年目から市立の幼稚園からお声がかかり、現場にご挨拶に伺った時のことです。園の壁には、同じようなタケノコの絵が一面に飾られています。「なぜ、みんな同じ絵なの？」と芸術士は疑問を感じ、お手本を先生が描いてそれを真似るように指導したのではと推測しました。取り組み当日、芸術士の方は、魚屋さんでモンゴウイカを4杯買って幼稚園に行きました。子どもたちは初めて見る生のイカに、



写真（上）：直接触れて感じた生命力と子どもたちの個性があふれるイカの絵。写真（下）：校舎との別れを惜しみ、思い出を塗り重ねる（高松市立香南小学校）。写真：NPO法人 アーキペラゴ提供（2点とも）

おっかなびっくり。観て、触って、墨が出て、大騒ぎ。散々遊び尽くして、さあ、イカを描いて、と言うと、いろいろな命と個性あふれるイカたちが描かれました（写真上）。その時の担任の先生は、現在はあることも園の園長で、この時の光景を昨日のことのように覚えていました。

#### ▼自己肯定感を育むこと

現場では、さまざまなエピソードがあります。クラスで自分の住む街を大きな絵に描いた時、自分が描くだけでなく、隣の子と相談し、描けない子を巻き込み、アドバイスしながら描き進めていた微笑ましい姿も見られました。集団での活動に参加するのが苦手な3

歳の子が、ボディ・ペインティング活動で、その時はやりたくないけど座って見ているだけだったけれど、後日、絵の具が大好きになって家で手にいっぱい付けて楽しんでいきますとの報告を保護者からいただきました。芸術士が来る日を楽しみにしている子も多いと聞きます。日常の活動で、このような綺羅星のような事例が報告されています。あるベテランの園長先生からの報告も紹介します。

「芸術士は、子どもたち一人ひとりのよいところをばっと見つけて、言葉にして褒めてくれます。その姿を見て、そういう視点、そういう褒め方があるのかと現場で気づくことが多々ありました。子どもたちが芸術士に会えること、共に過ごすことが喜びになっていきます。このことは、心が解放されている状態だと思います。自分を受け止めてくれる人がいて、相手のことも、自分のことも受け入れられるようになる。芸術士の活動には、そんな魅力があります。これは、すごいことです。」

23年からは、香川県教育委員会からのオフアードで、県下の4つの支援学校で派遣が始まりました。アートで繋ぐ心のハイタッチとも

いえる瞬間が、いろいろなところで起こり、先生方にはとても喜ばれています。

また、24年の夏、高松市内のある小学校が移転するにあたり、廃校となる思い出深い校舎を最後に思い切つてキャンパスに見立てて別世界を作ろうという実験授業のお手伝いをした芸術士もいます。ほぼボランティアで4日間通い、2年生の図工の研究授業を提案し、大成功でした（写真下）。

どちらも、第三者たる芸術士が加わることで、通常の授業では思いつかないような活動が創出できる貴重な時間だったと思います。

#### ▼今後の未来図

23年11月、一般社団法人日本芸術士協会を創立し、民間の芸術士資格の認定試験制度を進めています。24年3月には、高松市の芸術士活動の参加メンバーを中心に、52人を資格認定しました。今年は秋を対象を広げた試験を行う予定です。今後、人材を各地に輩出していきたいと考えています。

また、各自自治体が高松モデルを参照できるような事例集を兼ねた書籍を発刊し、予算整備と運営を担う法人の設立のサポートをする

のが、今後の当法人の目的の一つともなっています。

芸術士活動は現在、保育園・子ども園・幼稚園という未就学児施設を主なフィールドとして派遣していますが、前述の支援学校のほか、県内の公共施設など、子どもたちが集まる場所でも活動を展開しています。

この事業を始めた時から大きな懸念であったのが、レゾジョ・エミリア市と同様に、小学校に入学した途端、芸術士との出会いが途切れてしまうことです。そこで、アーキペラゴの事務所が移転した際に放課後児童クラブを開設し、夏休みなどは芸術士がいるクラブメニューも用意しました。せめて小学校半ばまで、図工サポーターのような存在として芸術士が関われる方法・機会を模索しています。

前述の津和野町は、教育委員会に芸術士が所属し、保育園に加え、町内の小学校でも芸術士活動を行っています。空き教室をアトリエと位置付けて、画材・資材等を管理しながら、定期的に本活動への環境整備を行っている小学校もあると伺いました。芸術士の活動が、今後の図工教育の未来へのヒントにもなると確信しています。